

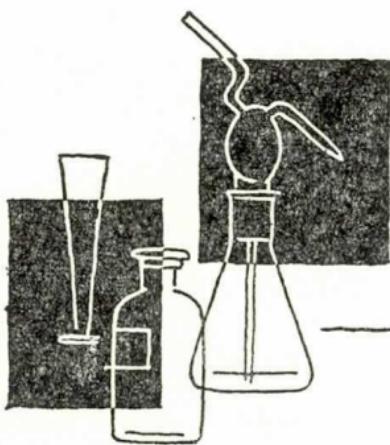
いまの化粧品

東京化粧品工業会編

発行
業者
出

い　ま　の　化　粧　品

東京化粧品工業会編



いまの化粧品 目次

商品の知識	まえがき
基礎化粧料の意義	一〇
化粧水	一一
△コロン	一二
△アストリンゼント	一五
皮膚の働き	二
皮脂膜の働き	四
化粧品の必要性	七
化粧品の系統	八

△中性化粧水	七
△果汁液化粧水	七
△アフター・シェービング・ローション	八
△オードコロン	八
ク リ ー ム	八
☆乳化について	元
△バニシング・クリーム	〇
△コールド・クリーム	三
△クレンジング・クリーム	三
△ナリシング・クリーム	云
△ホルモン・クリーム	云
☆ホルモンと美容	云
△乳液	〇
△ファンデーション・クリーム	三

メー キ ャ ツ プ 化 粧 品 に つ い て

四〇

△ 粉 白 粉

四一

△ 固 形 お し ろ い

四二

△ ク リ ー ム お し ろ い

四三

△ 乳 化 お し ろ い 又 は 棒 状 お し ろ い

四四

△ 水 白 粉

四五

△ ね り 白 粉 、 粉 白 粉

四六

△ 頬 紅

四七

△ 眉 墨

四八

△ ア イ シ ャ ド ウ

四九

△ ネ ー ル ・ エ ナ メ ル

五〇

お 化 粧 法 に つ い て

素 肌 美 を 守 る 化 粧

五一

頭髮化粧料

整髮料

△植物性ポマード

△鉱物性ポマード

△乳化性ポマード

△ヘヤーカリーム

△香

純鉱物液
植物性
植物性
植物性
油

舞臺普通化粧
化粧

化粧
化粧
化粧
化粧
化粧
化粧
化粧
化粧
化粧
化粧

六六六六六六六六六六六六

△びん付とすき油

△チ ツ

△

ローション頭髪料

△ヘヤー・ローション

△ベーラム

△オーデキニー

△ヘヤー・トニック

シャンプー料

△石鹼シャンプー

△ソープレス・シャンプー

△オイル・シャンプー

△エッグ・シャンプー

△酸性リンス

△スプレー・ネット

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

香 水

△えらび方、つけ方

特 殊 化 粧 料

△薬 効 クリーム

△漂 白 クリーム

△日 焦 け ど め クリーム

△脱 毛 クリーム

化粧品と皮膚障碍について

あ と が き

い　ま　の　化　粧　品

東京化粧品工業会編

ま　え　が　き

日常生活で水や空気、食事が欠くことのできない生命源ですが、餘りに身近かすぎるために当然すぎるよう感じ、そのありがたみになれ、まるで気がつかないと同じように文化生活に深くとけこみすぎた化粧品の眞の生命もおろそかにされ、或はときによく誤解さえ受ける場合がありますので、なるべく常識的にわかりやすくまとめて、その重要性と必需性を新たに認識して頂き度い願いからP R 委員会の発足を記念して編集してみました。

この小編が製造業者、販売業者、消費者、美容関係の人々、報道機関などの各方面に夫々幾分でもお役に立てば幸いと存じます。

皮膚の働き

何故化粧品が暮しの上で必要かを理解して頂くには、少なくともヒフの生理作用を知つて頂かねばなりません。

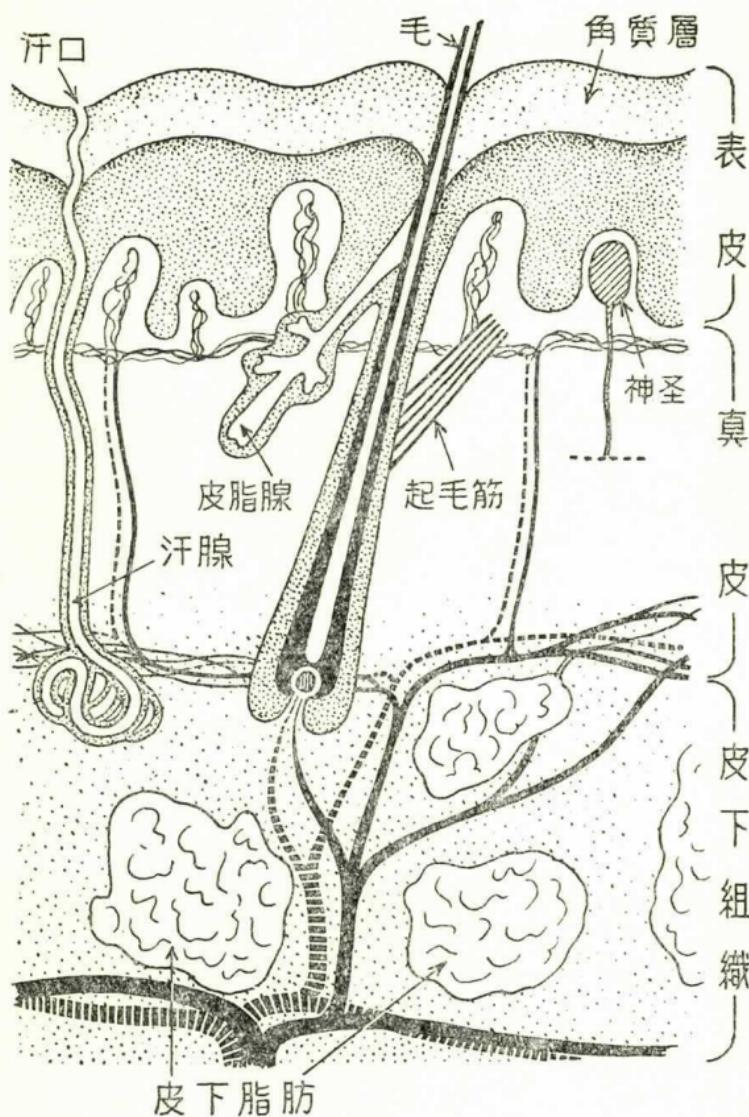
ヒフは想像以上に複雑な作用を日夜営んでいる組織ですが、なかでも最も大切なのは身体の内部を外からの種々の刺戟から守ることです、この保護作用を強めヒフの衰えを防ぐのがこれまた化粧品の最大の目的です。

ヒフは大別すると外側から表皮、真皮、皮下組織の三つに分かれ汗腺、皮脂腺、毛、汗口、毛細血管、神経、皮下脂肪などが附属しています。(第一図)

真皮や皮下組織の弾力性が弱くなつたり、皮下脂肪が少なくなると小ジワの原因の一つになりますし、真皮の血液循環が悪いと顔色がすぐれません。これらの働きはヒフの美しさの基礎となるものですが実際にはわたしたちの眼にふれるのは表皮を介してのことです。

従つてヒフの美しさを支配するものは表皮の透明度とか、水分の量とかに左右されますしお化粧品の大部分はここに使用されるものですからもう少し詳しく解説しましょう。(第二図)

表皮は表面から角質層。顆粒細胞層。^{かきゅう}有棘細胞層。^{ゆうせき}基底細胞層の四階級に分れて います。

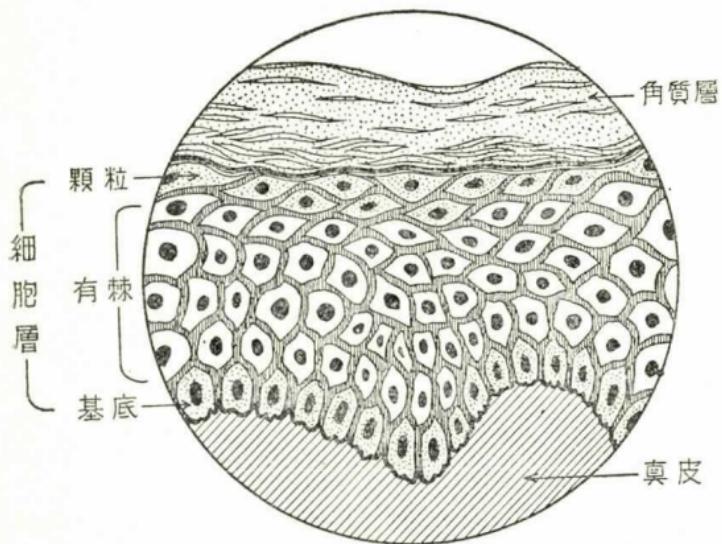


第一圖

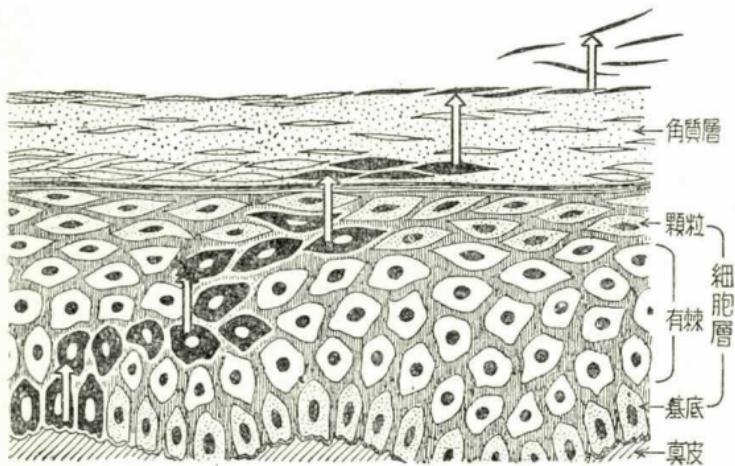
細胞層は柔軟な細胞からできていますが、角質層は角質と呼ぶ丈夫な組織で蛋白質を成分とします。体内的細胞には普通七〇一八〇%の水分が含まれるために柔軟で刺戟を受けやすいわけですがヒフの表面では細胞の構造が変化して逆に水分の量が一〇一二〇%しかなく丈夫な角質となり内部を保護します、云わば木のハダと同じことです。角質層と細胞層との接触面は保護層と云う膜に似たものではつきりくぎられています。このために外部からの刺戟を喰いとめたり、細胞層内部の水分が失われるのを防いでいるわけで、若し、ないと仮定すればムキたてのリンゴが時につれてその水々しさを失うようになるわけです。従つて角質層には或る程度の水分しか内部から上つて来ないのでこれを潤すものか、少ない水分を有効に活用するしか仕方がないわけで皮脂膜の重要性があるわけです。

皮脂膜の働き

なぜ化粧品が必要かと云うことをして頂く前に、この皮脂膜の生理作用を承知してもらわねばなりません。真皮や結締組織に源を発する毛穴や汗口は角層で口を開いたり、閉ぢたりしています。それは体温の調節や外敵に絶えず備えてわたしたちのからだを保護するためです。即ち汗口や毛穴を開いて汗や皮脂を出すときは暑い夏に多く、全面のヒフが一種のラジエターの代役



第二図



第三図

をつとめて暑さをしのぎます、また反対に寒いときは口を閉じて体内のエネルギーをできるだけ放散させないようにして保温の役目をします。他方、毛穴から分泌される皮脂は脂肪酸、スクワレン、レシチン、コレステロール等と水分からなり、汗口からでる汗は大部分が水分で少量の乳酸その他を含んでいます。皮脂と汗はヒフの表面にでた瞬間に皮脂中のレシチン、コレステロールが共に親油、親水性の乳化剤の働きをして（乳化と云う）、一種の水分を含んだ膜をつくりヒフ表面をおおい、同時に汗中の乳酸のために微酸性を呈し外部の刺戟やバイキンから保護します。わたしたちはこれを皮脂膜（乳化膜とも云う）と呼んでいます。云わば天然の乳化化粧料とも云えるものです。

この皮脂膜は健康なヒフにはどうしても欠くことができません。と云うのは角層をなす一枚一枚の角質は無核の云わば死んだ細胞でつねに内部から外部に向つて移行し（普通角化作用と云う）古いものから順にヒフから離れてゆきます。普通これをアカと呼んでいます。頭部で云うフケも同じものです。（第三図）新しい角質は適当の水分を含み、弾力性に富み外部からの衝撃にも耐え体内への影響を最少限度に止める役目をしています。即ち角質の水分はわたしたちが直接触れるヒフにとつては重要な役割をしていることになります。その証拠には若し角質の水分が一定量以上になると、長湯したときよく経験するように指腹に深いシワを生じますし、反対の場合には

日照りにあつたトントンぶきの屋根板のように外側に向つて彎曲します。美容では前を小じワの原因の一つと考え、後をアレ肌の現象としています。このように角質の水分は微妙な働きをしていますが、健康な身体の場合は前に解説した皮脂膜が角質の水分の調節を行つてもいるわけです。例えば角質に水分が多い場合は親水性の皮脂膜をつくり、水分が油分をつつむ格好をとりますので水分の蒸発をたやすくしますし、反対に足りないときは水分の蒸発を防ぐ意味で、油分が水分を囲んで所謂、親油性の皮脂膜に位置を換えると云う風な驚くほど精巧な作用を営んでいます。科学的にはこのような反覆を転位性と呼んでいます。

以上で皮脂膜の存在はどんなにか、わたしたちのヒフにとつて必要であるか、大体了解されたことと思います。

化粧品の必要性

では、このような皮脂膜はいつも存在するかと申せば、或る年令になりますと完全なものがでません。と云うことは角質はいつも水分や油分におびやかされているとも云えるわけです。

完全な皮脂膜は、毛穴からの皮脂と汗口からの汗とが或る一定のバランスで分泌されて始めてできるもので、いづれか一方が多いか少ないかすれば乳化しないためできないわけで、普通この

現象をアレ性とかアブラー性などと呼んでいます。

健康に恵まれた幼児から生理日の始まる前頃の所謂幼年時代には、これと云う化粧品らしいものを使わざとも羨ましいほどツヤや弾力のある肌をしているのは前記のようにバランスがとれて完全な皮脂膜があるからです。

ところが思春期になりますと、ホルモンの働きが目立ち、特に女性は（第二次性徴と云われる通り）肉体的にも精神的にも際立つて大人びてきます。例えば食物に好き嫌いが激しくなったり、環境に支配され、多感になつて神経をいらだたせ絶えず皮脂と汗の分泌量に変化をきたし、従つて完全な皮脂膜の形成が殆んど望めなくなります。好きな相手に言葉をかけられただけで普段より余分に汗を出すなどと云う経験はどなたもお持ちだらうと思います。

意識的にも無自覺的にも皮脂膜の形成が困難になれば、さきほどからお話した通り健康な肌は到底望み得られないわけです。

そこで、いろいろの化粧品が皮脂膜の形成に力を貸したり、補つたり、或は代役を勤めたり、ときには衰えた肌を美しくみせることまでするために必要となるわけです。

化粧品の系統

市販されている化粧品の種類は数多くありますが、これを生化学的とメーキャップ的に分類しますと殆んどが左の項目のいずれかに適応するものです。

- 一、ヒフの生理作用を助け保護するもの
- 二、メーキャップの基礎となるもの
- 三、純然たるメーキャップに必要なもの
- 四、頭髪の維持、助成に用うるもの
- 五、その他香水並びに香物として用うるもの等で、一、二は普通、基礎化粧料、三はメーキャップ化粧料（または仕上げ化粧料ともいう。）四是頭髪化粧料、と一般に呼称されています。
なお、色白とか、漂白とかの薬剤を加工した、即ち薬効的なクリーム、或は軟膏類は純然たる化粧品とは自ら内容及び使用目的等を異にしますので、この際別掲さして頂きます。
以上、各項目の商品につき、正しい使い方や、その目的などを理解して頂くための道しるべに解説してみましよう。

商 品 の 知 識

基礎化粧料の意義

理想的なヒツの生理状況はなかなか微妙なもので、殊に女性の場合はその変化が年令と共に移り変りが激しいものです。元来顔や手は生れおちるから風雪や太陽にさらされ、ゴミやバイキンのなかに育ち、他の身体のヒツのように人工的な布にも保護されず、文字通り丸裸の一生をすごすわけですから早く老けるのは当然です。云い換えれば生地の肌着は一枚看板のきたつきりすすめで洗い張りも、湯のしも洗濯も着換えもできないと云えます。そこで肌着に相当するクリームで保護したり、清掃したり湯のし代りの化粧水などが是非必要となるわけで、それら一切の代行をつとめるのが基礎化粧料の使命で、人間が生きるために食事をすると同様にヒツの栄養と保護をするこれら基礎化粧品の存在を、また大きな役割をしていることを最初に知つて頂き度いものですね。

化粧水

ヒフの表面（角層）に対し適當のうるおいをあたえ、肌を柔軟になめらかに保ち、角質の水分を一時的に補正し、或はヒフのPH（水素イオン濃度—酸性とか、アルカリ性とかを表わす略号で、普通PH七を中心とし、それ以下を酸性、以上をアルカリ性とする）を補正したり、ヒフ細胞に活力をあたえたりすることが主な目的で保健衛生の上から必要なものもあるし、化粧の基礎下地としても大事な役目をしています。

化粧水は特にそうですが、ヒフと化粧品のPHが日本では外国に比し喧ましく論議されすぎる傾向があるようです。化粧水のPHにしても、この点だけで選択しようとするのは早計と云ねばなりません。単にヒフを微酸性とか、微アルカリ性とか一定不变のもののように取扱うことが間違いです。

ヒフの性格は静的のものでなく、例えは感情一つによつてヒフ生理面に動搖が現われるよう、いろいろの影響に絶えず臨機応変に処置できる動的なものです。ですからPHに対しても常に健康であるかぎり動的なアルカリ中和能があつて、そのヒフのもつ正常な値にもどす作用が特に若いヒフにはあります。結局ヒフの反応は化粧品のPHが酸性かアルカリ性かと云うのはさして問

題ではなく、この能動的な面の力の強弱に左右されます。云い換えれば病的なヒフか、健康的なヒフかが大きな分歧点となるわけです。最近皮膚測定器と称するものを販売面で応用していますが、あれは単にその計る瞬間の汗のPHを測定しているにすぎません。わたしたちが云う皮脂膜のそれではないはずです。商品の解説の前に予め知つて頂く方が便利と思いましたのでつけ加えました。

△コロン アルカリ性化粧水をさして呼んでいます。

(処方例) 注 以後記載する処方例はいずれも性格を知るための参考に記したもので、勿論各

商品は個性をもつてているのは当然です。

アルコール

ヒフ柔軟調整剤

防フ剤(サルチル酸ソーダまたは安息香酸ソーダ)

一五—二〇%
五—一〇%

殺菌剤(パラアミノ安息香酸プロチル、エステル)

〇・二%

親水性乳化剤(ツイーン二〇)

〇・三—一〇・五%

苛性カリ、または硼砂

〇・〇三%または〇・一%
〇・五一〇・八%

香 料

着色剤（殺菌剤併用）

蒸留水または純水で

適宜
一〇〇%

まず始めに、化粧品のほとんどに重要な役割を占めるヒアルロニ酸柔軟調整剤ですが、ヒアルロニ酸の柔軟性や滑達性、或は弾力性を維持するための調整剤と云う意味で実際は皮脂膜をつくる際の汗のなかの水分に影響されますが、皮脂膜の項でお話した通り一定ではありませんので、それを人工的に補正する性質のものを呼んでいます。

従来は単に石鹼製造の際、副産物としてできる精製グリセリン（リスリンとも云う）を使用していました。これは不乾性の液体でかなり吸湿性（他から水分を吸いとる性質）に富むため角質の水分の補正に役立つものです。しかし、その適当量以上の使用は却つて吸湿性がわざわざして角質中の水分をグリセリン自体が吸いとる結果、使用目的に反することもあります。従つて最近は次ぎのような新原料が大いに活用されています。即ち、醸酵や合成でつくられた多価アルコールで殺菌性を有し、理想的な湿潤剤としてグリセリンの上位にあるプロピレン・グリコールや、葡萄糖、又は果糖を還元して得る甘味の粉末又は液の多価アルコールで酸、アルカリにも、大気中に放置しても変化しないし、水分の吸収と排出とが緩慢で角質を常に良好な状態におくのに役立ち、しかも栄養もあり、クリームに使用した場合にクリーム自体の状態を変化させない特長を

もつ、ソルビトール（ソルビットとも云う）の二つとグルセリンとをヒフの生理作用に最も符合するように適当に組み合せ、ヒフ柔軟、又は滑達調整剤と云っています。この一つの原料からみても、化粧品の内容は戦前に比較して遙かに生化学的にも優れていますと断言できます。よくある例ですが、わたしたちが折角苦心して理想的なクリームの状態にしておきますと、生化学的に無智な少數の美容師などが冬はグリセリンを適当にまぜて使うようにとかいます。とんでもないことです。専門家にまかして頂き度いものです。折角の商品を台なしにしてしまいます。

着色剤は従来は色素類を単純に使用しておりましたが、最近は殆んどが、細胞賦活作用や殺菌効力のある感光色素類や葉緑素などを多く採用し、デリケートなヒフ面に対処しています。

健康なヒフの場合は内部から順序よく細胞が移つて最後に無核の角質となり、それが古いものから剥離して（—これを角解作用と云う—）所謂、アカやフケの現象を呈します。年令と共に皮脂膜も不完全となり、従つて角化作用も鈍くなり、角質の一枚一枚も硬化し厚みを増し肌全体に柔かみを失うようになります。まずコロンで角質を軟らげ、次ぎに適当の水分を補足してうるおいのある肌によみがえらせるのが主な目的です。いずれの肌や年令にも向きますが、特にアレルギー、中年以後の肌には適しています。またヒフ面の汚れをふきとり、その他化粧下としても使用します。

化粧水でいつも問題になりますのは、そのPHです。日本人の健康なヒフは微酸性（PH五・六十五・八程度）となっています。そこでコロン（PH、七・五—八・五程度）を使用するのは如何にも矛盾しているようになりますが、前述のように角質の軟化剤としては適していますし、合理的なPHであれば一向に差支えないのです。と云うのは普通の肌でしたら、さきほどお話を通り、短時間にヒフ固有のPHにもどす力があります。これを中和能又は復原力と云います。若しこの中和能力（復原力）が弱いヒフ、云いかえればものにカブレやすい肌は、健康でない肌で云わば病的な（体内的に）肌とも考えられます。

従来から使用されていましたベルツ水はPH一二以上（強アルカリ性を示す。化粧石鹼液は軟一〇・三—一〇・八、洗濯石鹼液一三以上。コールド・パーム液九・五）ありますので、角質を化させるのではなく溶かしますので化粧用としては全然不向きです。よく洗濯なさつたあの手がビツクリするほどツルツルして一皮むけたと同じ感じを受けるのもその例です。こうなると、少しの刺戟やバイキンにも犯されやすく、特に冬などすぐ赤くはれ上がつて見にくい手になります。決して化粧水として使つてはなりません。

△アストリンゼント 酸性化粧水のこと、スキントニックとも呼びます。

主原料はコロンと全く同様ですが、幾分アルコールの量が増加し、アルカリ性薬剤の代りに硼酸、クエン酸、酒石酸、レモン、その他酸性の薬剤が併用されています。

思春期以上のヒフはホルモンの作用が急激に現われ、動的な乳化膜は一層むずかしく、汗と皮脂の平衡は殆んどたもてないので、正常なヒフのPH値を維持できず、よりアルカリ性に傾きやすくなりまます。その結果ヒフ表面の抵抗力が弱められ、ものにカブレやすくなつたり、吹出物を生じたりする素因をつくりますので、人為的にアルカリ性を中和し正常値にもどしたり、汗や皮脂の分泌量を一時的に抑制するのが主な目的です。また化粧石鹼で洗顔したあと、すすぎを十分すればそれでいいわけですが、アストリンゼントで更に短時間に中和能を助成するためにも、かなり用います。

一般に若い年代、アブラ性の肌に向きます。春から夏の化粧料でもあるし、化粧下としても結構です。

最近、ときどきアストやけと云う新しい言葉をききます。症状は女子顔面黒皮症と云うのとちがつて、特にヒフの軟かい目の廻りなどが黒ずんでくるのを云っています。角質は一種の蛋白質でケラチン質と呼ばれていますが、これにアスト中に使用する単純な酸性薬剤、例えば明礬などの金属塩を含みますと、蛋白質と反応し、蛋白凝固を起し角質の新陳代謝（角化作用）が妨げら

れ汗口をふさぎ、従つて汗の分泌が阻止され角層の下に炎症を起す結果と考えられています。一流の商品でしたら昨今、単に明礬を使用したものはありませんから、安心して御使い頂きます。

△中性化粧水 フエースローショーンとも呼びます。わたしたちの理想は自然の肌を永久にもつて生れたままの状態でおくことですが、内や外からの原因で肌の衰えは徐々に進行します。そこでそれに備えて化粧品が必要となるのです。できれば最も自然に近い理屈にかなつたものほど理想なわけです。例えば乳化膜の成分に近い性質のものをと云うことも最近の科学と乳化剤の発達で不可能とは云えません。そんな点から考えられた新しい乳化化粧水で殆んど中性液です。化粧水として将来もつと盛んになるものでしよう。

△果汁液化粧水 天然植物の種子、果皮、果汁などに含むペクチン類、糖類、蛋白質有機酸、ビタミン類などを活用し、栄養的な効果をねらつた化粧水です。家庭で趣味的につくられるものが多いようです。例えば、ヘチマ水、ウリ水、レモンオレンヂ汁液、マルメロ液などがあります。市販されている商品は原料が植物性だけに、腐敗しやすいので加工して改良されているのが

普通です。

△アフター・シェービング・ローション ひげそりあとのか化粧水です。主に、男性の専用品でアルコール六〇%内外を含み殺菌消毒と清涼剤とをかねて使用されています。

△オーデコロン 万能化粧水、コロン・ウォター、またはおしごり香水などとも呼ばれています。名の通り主原料はアルコール八〇%、香料五%以下で、その他乳化剤やヒフ柔軟剤（コロンの項参照）、及び水を加えて加工したもので。頭髪、全身のヒフ、おしごり、床まき、室内散布など利用範囲の広いのが特長です。また朝晩の洗面器に数滴おとして洗顔すれば爽快ですし、入浴の際も同様です。夏季、前記のアフターシェービングの代りにするのもよいし、男性のハンケチにふりかけるのも気のきいたものです。頭髪に用いても結構です。

最近は、エヤゾール化した商品が多く市販されるようになつて、ますます消費量が殖えていきます。

クリーム

化粧品の代表的な商品の集りです。まず各種のクリームを知つて頂く前にクリームとなる乳化の基本に就いて説明した方がなにかと了解して頂くのに便利かと思います。

☆乳化について 乳化とは二つ以上の互に溶けあわない物質、例えば水と油脂（液状でも固状でもよし）はなかなか混合しあわないので御存じの通りですが、乳化剤を用いますとほとんど永久的に分離しない第三の状態（乳液状、クリーム状）のものが得られます。これは互に微粒子の形で均一に分散している状態で、分散相（内相）と連続相（外相）の二つの組み合せからなります。この両液相間のひき合う力を界面張力と呼び、その力を零にすれば、両液相は完全にかみ合ない分離しないわけです。そうした物質を乳化剤、または界面活性剤と呼びます。戦前に比べ化粧品が一大飛躍したのもこの利用とヒフ医学の解明によるわけです。さて、化粧品の原料として広く使われる動植物性のもろもろの油脂は、水と乳化剤を活用して商品にできているわけですが、その性状から分類しますと次ぎの三種になります。

親水性O/W型（Oil in Water の略号）または水中油型ともいいます通り、水の微粒子が油脂の微粒子の周囲をかこんでいる状態のものです。

代表的な商品はバニシング・クリーム、乳液その他があります。

親油性 W/O型 (Water in Oil の略号) または油中水型と云います。前者とは全く逆な状態のものでその代表的なものはコールド・クリームです。

転位性 $W/O \leftrightarrow O/W$ 型とも書きますが、前二者のような略号は決つてないほど新しい型のもので、皮脂膜で解説したあの状態と似た性質があります。即ち新たに水、または摩擦をあたえると、親油性が親水性に位置を転ずるところから起つた名です。勿論、その反対のものもあるわけです。代表的なものは、親水性クレンジング・クリーム（ほんとは転位性と呼ぶのですが）後者ではファンデーション・クリームなどがあります。

以上、三型の特徴に就いては、夫々代表的な商品の項目でまとめ上げてゆく考えです。

ただ、いざれも乳化された商品は、完全に乳化されていて始めて目的が達せられるわけですか
ら、分離したものはその作用も減少することになります。

△バニシング・クリーム 全化粧品の 1~2% ぐらいの生産割合を占めるほど一般に理解されたクリームです。

処方例

ステアリン酸（植物性または動物性）

一二%

セタノール（セチル・アルコールとも云う動物性）

七%

鯨蠟（動物性）

三%

ラノリン（動物性）

二%

スクワラン（動物性）

三%

コレステリン高級エステル（動物性）

二%

ヒフ柔軟調整剤（化粧水の項参照）

一〇・一八%

パラ・アミノ安息香酸ブチルまたはエチルエステル（殺菌剤）

〇・二%

乳化剤各種

五%

香料

一〇〇%

蒸溜水または純水で

このクリームは絹の肌着に相当するものです。処方をみてもほぼわかる通り、よく皮脂膜に似た原料が使われています。云わば人工皮脂と考えて差支えないわけですから、使用しないのは肌のために損と云うことになります。化粧水は角質の水分の一時的な補助を主目的にしています。

しかし、生きたヒフは絶えず活動しているのですから、すぐまた補給してやらなくてはならないのです。そのためには化粧水より、バニシング・クリームの方が便利なわけです。水中に油滴を含んだ、即ち親水性のバニシングは長時間角質の水分の調整をするだけでなく、ヒフの表面を通気性（空気が自由に出入できる）の膜でおおい、外部の目に見えないゴミやバイキンがヒフに附着するのを敏感に防ぎ、それから惹起する弊害を保護する大切な役目をしつつ、他方ではヒフに必要な水は勿論、その他の栄養分をつねに補給調整し、ヒフの衰えを最も理想的に予防する大事な役割を果しているわけです。

普通第二次性徵、即ち十二、三才からいすれの肌に対してもかならず使用してよいものです。ただ長時間と云いましたが、一日三度食事するのと全く同様な考え方で、少なくとも一日三回ぐらいい、新しいものとつけかえることをヒフのためにも実行して頂きます。またうす化粧下、或は厚化粧のおさえとしても手や腕の保護目的にもなります。

△コールド・クリーム 云わば肌着の湯のしや洗い張りに相当する大変便利な万能的なクリームです。原料はバニシング・クリームに更に白色ワセリン、流動パラフィン（いずれも鉱物性）晒蜜蠟その他を加味し、乳化剤をかえて親油性にしたもののが大部分です。化粧の知識が高くなる

につれて、ますます需要の多いクリームでもあります。他の身体の部分とちがつて顔や手首は殆んど人前でも裸でとおして、少しも不自然さは感じません。だからと云つて、そのまま放任することは結局、自身が見劣りして貧しさを表わすことになるだけです。

今日化粧品が特に女性にとつて命から次ぎに大切なものとしてその必要性が認められてきたのもその哀れさを防ぐ目的にはかならないわけです。

まず始めに化粧水やバニシング・クリームが使われるわけですが、これだけ使つていればと考える方は勿論ないでしょう。早い話が肌着も下着も時々洗濯したり、のりをかけたり、アイロンかけしたりします。そしてそれを施した下着をつけたとき自身どう感じますか。生き返つたようなすがすがしい感じを受けるはずです。ヒフ面からみれば感ずるだけでなく、それこそ乾天に慈雨をうけた以上の有難さや効果のあることは、前からのお話でわかつて頂けると思います。

こうした大事な役目を主にやるのが、コールド・クリームなのです。水滴が油にとりまかれた形で、完全に乳化された状態の、即ち親油性のクリームですから、通気性ではありませんが、よくヒフ面の浄化を行い、あとに適当の栄養分をのこして肌を十分休息に似た状況におく作用をつかさどっています。

即ち、乳化された鉱物性油はヒフ面の毛穴、汗口の汚れを更に乳化して、ヒフ面からくるみと

るようにはがし取ると同時に、クリーム中の他の成分（乳化された水や動物性油脂の化合物）がおきかえられて肌に活力をあたえるわけです。このクリームはつけっぱなしにしないで、マッサージしたあとはガーゼか、コロンをふくませたガーゼで十分ふきとるのがほんとうです。それは汚れをくるみとつた用ずみの鉱物性油を、そのままヒフ面にとり残すことは紫外線の吸収を助け、逆に長いあいだにはヒフを悪い状態にすることもあるからです。（俗にアブラヤケと云うのもこうしたことで起る場合と考えられますから気をつけて頂きます）

一般に外出さきでの化粧なおし、就寝前の化粧おとし、マッサージ用など広く使用されています。

最近、アブラではアレ性は治らないと云われているようですが、そんなことはありません。アレ性は治ります。

わたしたちの最上部のヒフは角質層と呼ばれています。この角質層は無核の細胞の残骸で、角質と云うものが重なり合つてできています。そして外敵に備え、わたしたちの体の内部を保護しているわけです。

丁度、トントンぶきの屋根板を想像して頂ければわかりますが、その一枚一枚の角質はつねに一定の水分を必要とします。例えば体のヒフの場合は一〇一二〇%の水分があるわけで、若し、そ

の保有量が少ないとときは日照りにあつた屋根板のように外側に向つて彎曲します。そのような状態を普通、わたしたちは肌がガサガサしているとか、アレ性とか呼んでいます。反対に多い場合は長湯したり、洗濯したあの指腹に大きなシワが生じるように、シワの溝が深く刻まれます。いずれも健康な肌とは云えません。そこで角質の水分をつねに一定にするために生理的に皮脂膜ができるわけですし、またその目的を達成させるために基礎化粧品の存在価値があるわけです。このことは幾度も申上げた通りです。

水分は角質になくてならない成分です。即ち、角質はケラチン蛋白質としての性質を強く表わしたものですから、水分は結晶水のような形でその分子の一部と考えても差支えないほど、重要な成分となっています。このことはブランクと云う有名な人の実験で、乾燥した角質（彎曲したもの）を油の中に漬けておいても、その状態は変らないが、水に入れると元の柔軟性を取り戻し彎曲がなると云うことが明らかにされました。

アブラではアレ性は治らないと云う言葉は恐らくこれだけを早合点したためにあやまつたのだろうと思います。

わたしたちが実際にヒフがガサガサしたとき、オリーブ油でもワセリンでもよくぬりますと目に見えて治ります。

これは油が角層の表面をおおいますから、絶えず汗口や毛穴から分泌している汗（水分）や皮脂は、油の膜のために蒸散することができないで、油の膜にはね返され結局、角質に水分を補給することになります。丁度、御飯をむす理窟に似ています。ビニール・レインコートを着てしますと、裏側に水滴（汗）がたまるのでもわかると思います。

水分の全然含まない油でもそうですから、動植物油を水と完全に乳化させた油性クリームでしたら問題なくアレ性は治ります。ただ、わたしたちの動的なヒフに不通気性の油膜を當時つけておくことは、ヒフの生理を円滑にしないために重労働から小ジワやタルミが早く起ることも考えられますから、やはり目的を達したらすぐ止めるのが、健康な肌を維持するために必要でしょう。

△クレンジング・クリーム　名の通り清浄を目的にしたクリームで、殆んどが乳化性クリームになっています。

このクリームはヒフ面から汚れの一切を取除くのが主目的ですから、栄養面は二次的にした考えでいます。従つて原料的にみますと、コールドを更に改組して鉱物性油を主に乳化させております。同じ油脂のうちでも動植物性油脂の方が遙かにエマルジョン（乳化）がやさしいわけです

から、この商品は他のいずれのクリームよりその意味では乳化技術がむずかしく、商品から云え
ば変化しやすい厄介なクリームともいえます。

わたしたちは普通、汚れのことをアカと呼んでいます。これには鹹化性と不鹹化性の二種類が
あります。

鹹化性のアカはごく一般的に考えられている汚れで、化粧石鹼や洗濯石鹼（ほんとうの肌着や
下着を洗う際に用う）で十分洗いおとせるものをいいます。

不鹹化性のアカは石鹼ではチヨツとおちにくく、どちらかというと油性の汚れをさしていつて
おります。

ヒフ面にもこの二種類の汚れがあるわけです。毛穴から皮脂がそのままヒフ表面に長くおかれ
ると、ゴミやそのなかに含まれるバイキンや太陽光線、体温などいろいろの条件がかさなつて、
酸化されて固いアブラのかたまりになります。もしそのまま放置すれば毛穴や汗口をふさぎ、從
つて皮脂や汗の出口がふさがれ吹出物やニキビの原因となり、更に皮下にたまつてヒフ炎症さえ
起すこともあるわけです。

こうした面倒な酸化油性のアカは、石鹼ではなかなか洗いおとしがきません。丁度、金物の
さびをとるとき、サンドペーパーでするよりも、新しい鉱物油に十分浸してから布でふきとる方

が金物にキズはつかず平均にサツパリとれるのと同じ理窟を応用したわけです。

即ち、クレンジング・クリームで十分マッサージしますと、メーキャップの顔料や原料油脂は勿論、ヒフから離れようとしてアカまで乳化され、鉱物油が抱きかかえるようにくるみとつてしまふ、文字通りのクリーニングをするクリームです。

△ナリシング・クリーム テイシユ・クリームともいいます。栄養クリームのことで、主原料は晒蜜蠟、ラノリン、スクワラン等が多く含まれ、栄養価を考えたクリームです。大体ハイゼニック・タイプ（中性クリームと一般にいう。コールド・クリームとバニシング・クリームの中間の性質をもつたクリームの意味）です。

ここで栄養という意味をまず考えてみましよう。わたしたちがもうもろの食事から摂取した内容物はすべてこれ栄養であり、生命力を維持するために欠くことができません。云いかえれば栄養は食物から摂るのがたてまえです。

殊更に栄養クリームと謳うのは、やはり根拠があるわけです。顔や首、手のヒフは幾度もいうように丸裸の一生ですからにかと刺戟を受けやすいし、神経質な皮脂腺や汗腺も内外の影響に左右され、できるはずの皮脂膜も思うにまかせず、従つて角層の健康もともすれば、不健康にお

ちいりやすい。そこで、皮脂中に含むコレステロール（ラノリンからとれる）、スクワラン（鮫肝油から精製される）、レシチン（燐脂体とも云う卵黄、大豆油から精抽する）などヒフのためには、ぜひとも必要な成分を乳化してクリーム中に含ませたものを用いて、外側の防禦と内側から補いきれない栄養分を補給する意味で、この名があるわけです。単なる動植物油を補給するより、水と乳化した、例えばバターの方が消化吸収がよいのと同じことです。

いずれの肌にも向きますが、中年以後の肌、乾性のひどい肌などにバニシング・クリームと同じ目的で使用します。

極端な云い方をすれば基礎化粧品はいずれも、ヒフに必要な栄養的なもののかたまりです。特にその点に力を注いだものと考えて使つて頂けばよいわけです。

わたしたちが毎日している食事にしても、各自の嗜好はまちまちですし、ときには油ぎつたものの、淡白なものと云う風に身体の調子に応じて常に変ります。当然ヒフにも淡白なバニシング・クリーム、中性のハイゼニック・クリーム、油ぎつたコールド・クリームと云つたタイプがあつてよいわけです。そのいずれを選び、適宜に正しく使い分けするかどうかが美容の上からも、また美しい肌を保つためにも大切な鍵であると考えて頂けばよいでしょう。それには各自がヒフに就いてよく知つておくことが肝要です。

△ホルモン・クリーム ホルモンとは内分泌物と云われ、生体内で生産され、生体内に行きわたつて働くものを総称して云います。これと全く反対に美容にも関係の深い各種のビタミンは生体内で生産されず食事、その他の方で摂られその過剰は体外に排泄されます。

化粧品の場合に云うホルモンは多くあるうちの一部で性ホルモンをさし、前述の栄養クリームタイプに加工したものが一般的です。ですからこの種のクリームも広い意味では栄養クリームとみなしてよいわけです。

☆ホルモンと美容 美容には外からと、内からの二つがあつて、うちおもての関係にあります。この両者が完全に近く行われて始めて年令にふさわしい美しさが保たれるわけです。美容医学や生化学の発達はヒツの変化、ヒツの性格等を次第に科学的に明かにしてきましたので、各種の化粧品も原料、乳化剤の出現、技術の進歩等にともなつて驚くほど改善された現在では、外からの美容、即ちヒツの保護、清浄、栄養は勿論、肌をいためず美しくみせることまでが安心して行えるようになりました。ですから、外からの美容に就いては大体満足できる域に達したと云えるわけです。しかし、これだけでは眞の美しさは生れません。即ち、内からの美容を忘れては駄目です。これには二つの方法があります。一つは体の摂生、つまり食事、睡眠、適度の運動、健全な精神と云つたものの総合から湧き出るもので、最近はかなりこの点について理解ってきた

ことは嬉しいことですが、短期間では到底その効果は期待できませんし、目に見えるほどの変化もわかりません。ともすれば疎かにしがちです。けれども美容にとつて最も大事なことだとうことをもう一度ふりかえつて頂きます。他の一つは性ホルモンとか性腺刺戟ホルモンとか、各種のビタミン、その他のいろいろの医薬品を服用したり、注射したり、塗擦したりすることによつて、すみやかに美容の目的を達しようとすることです。

女性の悩みであるヒフの老化、肌の衰えを治すとか防ぐことは、なかでも大変な仕事ですがホルモン・クリームはそれらを若返らすものとしてもやはされていています。

実際にヒフの衰えをなんの尺度できめるかむずかしい問題ですが、大体ヒフの弾力が失われ、小ジワが生じることをヒフの衰えとみなしています。これは弾力繊維の衰えをさしたもので、一般にはヒフがザラザラして小ジワがよつた状態を総称しています。前の衰えは根本的な真の衰えで絶対に治すことはできません。後の仮りのヒフの衰えは適宜の計らいで治すことも防ぐこともあります。基礎化粧品はいずれもそのためですが、なかでも女性ホルモン・クリームがその目的に力をおいてつくられています。

使用される女性ホルモンは卵巣から分泌される卵胞ホルモンで、普通エストロン、エストラジオール、エチニール・エストラジオール等が多く、女性特有のまるみのある体の曲線、女性らし

いスペベしたヒフや乳房の発達に必要なもので、女性美の根源とも云えます。また健康なヒフからもよく吸収されますし、ぬつた局所のヒフの血液循环を盛んにする作用があります。

従つて循環が悪くヒフの水分が欠乏して起る仮りの小ジワなどには効果があるわけです。では女性であればだれでもが使用してよいかと申しますとそうは参りません。一般に、美しいヒフ、魅力ある肌と人に云われ、自分でも感する年頃は大体、二十代前後が頂点と云われています。そして二十五才頃から下り坂に向つて参ります。その頃から最後の頼みとしてホルモン・クリームを使い始めるわけですが、わたしたちのヒフは体全部のヒフとして働いていて、顔のヒフだけ独立しているわけではないのです。体のどこかが汚れていればその影響は他にも拡がつて、例えけば頭にフケが多いときは顔も油性に傾いてきますし、手や足をケガすれば顔色もすぐれないものです。ですから顔だけにホルモン・クリームを使つても、他のヒフを省みないときは、その効果は期待できないことになります。なんと云つても体の健康を中心にして、生き生きとした感情と張りのある生活をすることが、美をつくる軸であると云うこと申し込み上げたかつたわけです。

ホルモン・クリームでよく問題になりますのは、その含有量です。常用なさるものとしては、クリーム一グラムに五〇〇一二〇〇〇単位程度が最も危険がなくよいと云われています。中の肌に栄養クリーム、またはバニシング・クリーム代りに常用します。また化粧下としても便利

です。

使い始めるときは予定の生理日の前後四、五日間はさけた方が無難です。往々にして刺戟が強く、出血を早めたり、ヒフ炎症を起すこともあります。ホルモン・クリームにかぎらず生理日の前後はヒフが最も神經質的に敏感症になつていて、経験のない、新しい化粧品を使うのはさけた方がよいでしょう。

栄養を目的にしたこの種のクリームは肌を清潔にした直後、よくすりこみ、そのあとに化粧水を用います。毛穴が十分あいているときに用いた方が無駄が少ないわけです。車庫のとびらが閉つていては車ははいれません。

△乳液 ミルク・ローションとも云つています。従来はともすれば単なる化粧水のようにみられがちでしたが、原料からみれば栄養クリームをミルク状にしたもので、果汁液化粧水を人工的に改良した栄養化粧液です。使い方や、考え方によつてはむしろクリームより肌にのばしやすくムラなくつくので便利な商品とも云えますが、クリームほど長時間、角質の水分の調整ができるわけですね。

アブラン性の肌、うす化粧の下地にクリーム代りに使用します。また夏期の化粧下としてサツバ

りして効果的です。冬期の手や首の荒れどめにもよいものです。男性のヒゲそりあとにも好適ですが、最近の商品には性ホルモンが加味しているものがありますので、よく説明書をみて使うべきです。

殆んどの商品は新しい乳化剤の出現で中性液ですが、ときに酸性のものもありますから、肌に合つたものを選んで頂きます。

ミルクの濃淡は原料油脂と乳化剤の組み合せで決定しますが、決して商品の良否のめやすにはなりません。好みで結構です。但しクリームの項で最初に申上げたように、完全に乳化したものでなければその目的は半減されますから分離したものでは効果が少ないのでしょう。

△ファンデーション・クリーム 日本語では基礎クリームとなります、この場合の基礎は前述まで解説してきた基礎化粧品のそれと、メーキャップの基礎と云う両方の意味に解して頂く方が話がわかると思います。

と申しますのは、今まで必ずと云つてよいほどメーキャップ化粧品の一部として取扱われてきましたが、化粧法の進歩や内容の改良、ヒフ科学の解説など、あらゆる面が発達してくるにつれて、なにかと疑いも起きてくるのは当然です。そこで、慣例を破つて基礎化粧品の部に次

項の口紅と共に編入しました。云い換れば、新しい美容医学と製造技術の向上との現われとみるとべきでしよう。

日本の女性はヒフの美しさに強い執着をもつています。わたしたちが美しいときには、必ず素肌の美しさを指しています。事実、日本人のヒフは俗にモチ肌と云われる通りキメが細かく生毛も目立ちません。これに反して欧米人の写真顔は別として、実際には毛穴や汗口が大きく従つてキメはミカン肌で、ザラザラした感じで生毛も多いのが普通です。

そこで欧米人の化粧目的は化粧品で肌を塗りつぶすことが主な目的ですが、日本の女性の場合にはまずヒフを整えることであり、素肌の美しさの効果をより以上に發揮する化粧にありますのでいきおいどの商品もそれを主眼にして作られているわけです。近頃、外国品が合わないといいますのも当然です。

ファンデーション・クリームもまた、日本の女性の限りない慾望にこたえて誕生したような商品の一つと云えます。

原料は栄養クリーム、バニシング・クリームのタイプに粉白粉の一部を完全に分散させた形態で、クリーム状と、やや軟かくしたミルク状並びにその中間的な状態のものなどありますが、性状から親水性と親油性とに分けることができます。

あとに解説します粉白粉でわかつて頂けるはすですが、粉白粉の原料は無機と有機の粉末で脂肪や水を吸着する性質が多少あります。従つてぞんざいに用いますと、折角の皮脂や汗を吸収してヒフをザラザラにすることもあるわけです。よく粉白粉で荒れるとか云うのもその一例です。これは粉白粉が悪いのではなくて、使用する側の商品知識が低いために起るよい見本です。それで粉白粉を使う場合には、それ相応に基礎化粧の下地を入念にしなければなりません。と云つても近頃の女性は性急な美しさを求めて手間のかかる仕上げを面倒がる傾向があるようです。

そこで簡単に素肌美を活かし、かつヒフに影響のない商品として時代の要求に応じてこのクリームは生れてきたようなものです。

基礎のクリームの中に粉白粉の一部を分散させますので、粉白粉の特性である脂肪と水の吸着は製造の際十分終つてしまひますので、吸いとり紙がその作用を終つたと同じことでヒフへの影響は零になります。またクリーム七〇に対し三〇以下の量しか加味していませんので、使用した場合も目立たないで女性待望の殆んど自然に近い素肌美を表現します。更に粉末成分は光線を遮断しますので、クリーム中に均一に分散した粉白粉はヒフの表面でもムラなくのびていますから、或る程度、日焦げを防ぐのにも役立つと云つたいろいろの便宜が数え上げられます。

親水性のものは使用したあとがサツパリして、全くつけたのがわからないほどで素肌の美しさ

を強調しますが、発汗などによつてくずれる弱味があります。アブラ性の肌に適します。

親油性はその点素肌の上にうすかわを張つたようにツヤを増し、効果も大きいですし発汗などでもくずれない点が持ち味です。アレ性、乾性の肌に適します。

一般に家庭内や買物の外出などぐらいの気軽なくらしに用いたいものです。

ほんとうのメーキヤップのときは、更にその上にファンデーションの色よりやや濃いめの粉白粉を十分にはたき、おちつかせたあと余分を軽くふきとり、化粧水か乳液でおさえて頂きます。粉白粉の代りに棒状おしろい、クリーム・パクトなどですと一層メーキヤップの効果は引き立ちますし化粧くずれも殆んどありません。

口 紅

ルージュと同意語に知られ、また棒紅とも呼んでいます。

美しい人と云うのは素肌の美しさがどこまでも土台ではあります、それだけでは十分とは申せません。最近の美容が戦前のように顔にだけ化粧品を使うと云う平面的な工作から立体的なものに移り、単に顔だけにかぎらず姿態、動作、言葉づかいなどすべてが綜合された調和からみるようになつたことは大きな美容の進歩と云わねばなりません。

この立体的な感覚を端的に表現するには口唇の美しさの如何にあります。特に日本の女性の素肌美を更にひき立てるのに欠くことのできない重要な役割を口紅は果して います。

戦後のコールド・ペーマの普及と並び驚くほど実用化されました。

口唇の美に焦点を合せ顔の美しさを強調する、いわゆる口紅によるポイント化粧は今日、昔流に云うおしゃれとはかけ離れすぎています。事実、口紅は口唇の美しさを強調し、ひいては素肌の美しさを更に増すことになりますが、それだけのことでしたら、わざわざ基礎化粧品の部に仲間入りさせる理由にはなりません。

わたしたちの口唇はヒフの一部と考えられていますが、実際は一種の粘膜とみる方が正しいのです、口唇には毛穴も汗孔もありません。従つて、最初に申上げた皮脂も汗も分泌しないわけですから、皮脂膜と云う重宝な自然の化粧液もできないことになります。加えて、食物をとる入口でもあり、言葉を発する唯一の場所ですから濡れたり、汚れたりすることが他のヒフの部分より割合に多い結果、そのままにおきますと、いきおい口唇は荒れたり、縦シワがよつたりして衰えが他より目立つてきます。特に目もと、口もとといわれるほど人目につきやすいし、ちょっとした汚れや衰えでも、折角の素肌美を台なしにするという美容の上からも決しておろそかにできな い処です。

そこで原料は化粧品原料として使用されている大抵の動植物性の油脂を組み合せ、顔料染料を加えて作ります。この混合された油脂が口唇の表面でうすい親油性（水になじまない性質）の油膜をつくり、他のヒフの部分の皮脂膜に相当する役目を司ります。これが口紅が基礎化粧品である証左です。色彩は口唇を保護する目的に附隨して、どうしても口唇に必要なものであるが、ついでになんの影響もなく美しくみせることができるものならという、一石二鳥的な考え方でつけたと思つて頂く方が当っています。勿論、最初の頃はそこまで考えてのことではなかつたようですが、これも新しい美容医学の賜物といえるでしょう。

一般に原色と変色とがあります。共に各色がありますが、変色はツートンともいっておりますが、これは顔料の代りに酸性染料が加工してあり、使用しますと唾液のアルカリ性のために染料が変化して赤紅色になるわけです。

・口紅を使用する際、よくコールド・クリーム、栄養クリームで下地をつくるようにもきますが、つけてよくマッサージしたあとは乾いたガーゼできれいにふきとることです。でないと口紅の成分中の親油性の乳化剤とクリームとが乳化して拡散されやすいし、おちやすくなり、よく歯を染めたりするふざまなことになります。

一番上手な使い方は、クリームでマッサージしたあとを残らずふきとり、変色をつけ、次ぎに原

色、変色の順に筆を用いて外側の線をえがき、最後に内側に向つて指先きでのばします。そのあと紙かガーゼで余分の紅をとる気持で軽く口唇にはさみおさえます。最も理想的にするには、各色とも基準色ですからヒフの色に合せるのに苦労しているはずです。そこで三色ぐらいを求めこれを合せて、好みの色にしたものを使用します。これはもうおしやれの最高でしよう。

とに角、いい加減な色や使い方をなされば、却つて素肌の美しさを台なしにしますので、余程氣をつけてして頂き度いものです。

以上で基礎化粧品の大系をつかんで頂けたと思います。商品は夫々なんらかの点で少しづつちがつてゐるものですが、その目的には差はありませんから、好みによつて商品を選び上手にお使いになつて下さればよいわけです。

メーキャップ化粧品について

最近の美容界の進歩は實にめまぐるしく、化粧品を例にしても、次ぎから次ぎへと新しいものが発表されている現状です。

しかも、これらは単に仕上げを美しくみせると云うばかりでなく、もつと進んで、ヒフに対し

でも根本的な考え方をもつようになりました。

一方、一般の美容常識も高まつて、メーキャップにしても単に顔だけの問題でなく、身体の形との釣合い、服飾、アクセサリー、髪など全身との調和のもとにメーキャップを考えるようになり、個性的なものが主流になつてきました。従つて、ますます美容の知識を深く知る必要が生じてくるわけです。

基礎化粧料の最初にお話した通り、わたしたちのヒフの生理作用は想像以上にデリケートな働きを休みなく続いているわけです。ですから、理想としてはそれを助成するための基礎化粧料は欠くことができませんが、余りヒフからみてどうかと思われるようなものは肌のために却つてよくないと云うことが云えます。そうなるとメーキャップ化粧品はどうでもよいことになりますが、時にはかなりかたよつて基礎化粧品より重点がおかれているようにも見えます。

人間は生れながらに美に対しての憧れが強いもので、特に女性にその傾向があるようです。

一口に美しさと云つても表面（形態）と内面（無形）の二つが融和し完全に身について、そこから湧き出てくるものが、一番美しく感じさせるものです。

また美しさは神の創造を全然無視することはできないでしようが、芸術作品をうみだすようなたゆみない努力と創造の結果築き上げられるものもあります。なかでも心のありかたは表面の

美しさと切り離すことのできない大切なものです。わたしたちの周囲の生活環境が無意識に心のうちに浸みこみ、わたしたちの人生観や生活態度に大きく影響してくるものです。そしてそれがそのまま容姿にも、言葉にも、行動にも輝きと魅力を添えるものだと云うことを知つて頂き度いと思います。

一人一人の女性についても音楽や美術と同様に嗜好が違う以上、誰のが美しいかと云うことは決められません。と云うことは美しさは決して固定した標準と云うものはないと言ふことです。

これから解説するメーキャップ商品も、その外的な美しさを築き上げる手段として用いるものであつて、これだけで人間愛に溢れたほんとうの美しさは生れないと言ふことを申上げたかつたわけです。そうでないとメーキャップ商品を使うのではなく使われてしまう心配があります。

この種の化粧品は人工的に肌を美化し、或は表情を変えるために使用するものです。従つて如何に美しく、または長もちさせるかが商品の重要な鍵となります。それだけにヒフに対してはいくらかの犠牲を強いることになりますが、商品の知識を知り、適当に使用を間違わなければ決してヒフを損することはないはずです。

△粉白粉 この生命は肌に対する思うような色相を自然に近い形で表わすことを主目的にして

おります。

使用されている原料は亜鉛華、硫化亜鉛、二酸化チタン、シリク・パウダー、雲母粉末、濾粉類、タルク、カオリイン、ジンク・ラウレート、ステアリン酸亜鉛などの粉末を適宜組み合せ、更に顔料、香料を加え、いろいろの行程を経て商品となります。

前記の粉末原料は被覆力（隠蔽性とも云う）、ツキ（附着性とも云う）、伸び（延展性とも云う）と称する三つのまちまちの性質をもつていて、これらをちがつた肌に適合するようにな案配する技術が色調と共にむずかしいところです。

ヒフを健康なヒフ（中性とも云う）、アレ性、アブラ性と三つに大系するように粉白粉も夫々の肌にあつたものがあります。

重質性はアブラ性の肌や厚化粧に適するようには被覆力が強く、ノビの点に劣ります。

軽質性は反対に乾性の肌や、うす化粧に用います。これはノビがまさりますが化粧くずれがしやすい。

中間性は両者の良い点に主力をおいたもので、ツキとノビを平均にならしたもので、市販の殆んどはこの系統で占めています。

ファンデーション・クリームでも申しましたが、使用される粉末原料は多少とも水分や油分を

吸着する性質があります。そのままヒフにつけますと、スス掃除したあの肌のように油気がなくなつて妙に力サカサしたりする経験があると思いますが、全くあれと同じような結果になります。それは皮脂や汗を粉末原料がとつてしまうために起る現象ですから、粉化粧の場合は、化粧下地を行います。肌の上でファンデーション・クリームが後にお話するクリーム・パフを自分で速製するような心構えがぜひ必要です。また一日中つけっぱなしをしないで、少なくも、二三回コールド・クリームかクレンジング・クリームでおとし、しばらくでもヒフに休息をあたえ、また新しく粉化粧するように習慣づけて頂き度いものです。

就寝前はどんな場合でも粉化粧はきれいにおとし、あとに栄養クリームなどでヒフの回復をもどすようにします。一日ぐらいといい加減にしますと、一日だけヒフはあともどりするのでなくで、ふり出しにもどるくらいに考えて頂きます。旅行などで人目もあり、また夜汽車でそのまま過した翌朝のヒフは驚くほどやつれている経験が一度や二度あること思います。美容には寝不足や精神的な過労は大の禁物です。十分な休養は若さを保つ手取り早い方法です。

粉白粉の色調とヒフの色との調和はメイキャップの最も大切なことです。商品は一応の基準色を揃えてはおりますが、各自のヒフにそのまま似合うことは稀です。口紅の色調のときもお話を通り、白色を基調にして同じメーカーのものをセロファンかビニール袋のなかでよくませ、

肌の色と合せるようになりますが一番上手な用い方と云えます。

粉白粉はヒフにどちらかと云えども悪いようにだけ考えられますが、寒い風にあたつて頬が赤くなるようなヒフには保温の役目をします。また光線を透さないため、紫外線をさけて、日焼けを防ぐには日焼け止めクリームより物理的で完全なものであります。

△ 固形おしろい コンパクトと殆んど同じ形態です。粉白粉ですと微粉末ですから、どうしてもあつかう場合に衣服についたり、メイキャップの際に肌に密着させる時間的なろさもありますし、携帯にも不便がありますために、これらの目的に副うためにできたようなものと考えて頂きます。ですから粉白粉とヒフ柔軟剤（クリームの項参照）か、グリセリン、プロピレン・グリコールなどの単体原料とをよくませ合し、プレスして製します。

使用上の唯一の欠点は、パフを水または化粧水をしめして化粧することですが、肌にそのままムラなく簡単に仕上げられるのが特長と云えます。

△ クリームおしろい 基礎化粧品のうちでお話したファンデーション・クリームと全く正反対の比率に粉白粉とクリーム、または乳液が乳化分散しあつたものです。

粉白粉そのものはなんども云うようですが、水や油を吸いとる性質がありますので、ファンデーションのようにしてその性質を零にして、しかも化粧仕上げが不自然でなく美しくみえるようにしたものです。

ファンデーションではそれ自体に粉白粉分の割合が少なすぎますので、メイキャップの目的には遠いので生れた商品です。

即ち、白粉粉末の粒子の外側をクリーム、または乳液で包んだ恰好で、云わば天ぶら式になつてありますから使用した際、粒子の相互間に連なりがけて、ノビもツキもよく、ムラにもならず簡単に仕上げられますし、粉白粉やコンパクトのようなヒフへの影響は殆んどないと考えてよいものです。

お使いはじめてから少したつと、急にツキが悪いようにききますが、大抵の場合、使用しているパフが油や垢に汚れて光つていて、のらないためのことが多いようですから、ときどきパフを変えるか、清潔にしたものでなさるようにして頂きます。

△乳化おしろい　または棒状おしろい　原料は白紅に使用する油脂と粉白粉顔料等を混合して製したものと、さきに油脂をコールド式に乳化したものに分散させて成型したものとの二種が

あります。後者はフエースチックとも呼ばれています。

いずれもメーキャップを最も効果的にする場合には重宝なものです。即ち、化粧くずれはありませんし、いずれの肌にも密着して思うようなメーキャップができ、しかもツヤもあり立体的感覺のすぐれたものです。

申し分のないメーキャップ用の化粧品であると云うことは、ヒフの面から考へると、いろいろのことがあるのは当然でしよう。例えば、ヒフの表面を口紅同様に油のうすい膜とおしろいで覆うために、ヒフの生理作用はいきおい妨げられて、それから起るヒフの老化なども考へられます。従つて一日中使用するものなく、ときと場所に応じて短時間行う方がヒフの若さを失わずに済みます。テレビ出演、舞台化粧、撮影と云つた職業的な化粧にむいたものです。

誰よりも美しいと云うのぞみは争われない事実ですが、かと云つて美しくみせるために手段を選ばないと、ごく短いあいだの美しさしか望めないことになります。やはり、なんと云つても、土台となる素肌の美しさを怠つては砂上樓閣となりましよう。

毎日の生活のなかで衣料を例にとつても同じことが云えます。家庭で着用しているふだん着と外出の際にだけ使用するよそ着とがあります。よそ着を面倒だからと云つて帰宅しても脱がず、きていることが続くと、ふだん着と変わらなくなるのとよく似ています。ですから外出

の盛装用のメーキャップは必要以外は少しでも早く取り除いて頂きます。よそゆきの着物ですと、なんとなしに心も緊張して帰宅するとつかれを感ずると全く同様に、顔のヒフは、それ以上に重労働をしていると考えて差支えありません。必らず実行して頂ければメーキャップ化粧による影響は殆どないと思います。

注 パン・ケーキ、クリーム・パフ、その他、いろいろの登録名称がありますが、要するに粉白粉の原料、または一部を乳液、またはクリーム状にして、これをコンパクト式か棒状に整形したもののことで、本書では夫々の新名をつけました。

△水白粉 現在は特定の職業的なメーキャップ化粧に使用されるくらいで、その数も少なくななりました。そして、これに代るもののが、液体ファンデーション、クリーム白粉と云つたものでしょう。原料は粉白粉の一部を化粧水に加味したもので、用いるときはよくふつて頂きます。二層の上層の化粧水は透明で、若し不透明なときは腐つてているか変質している場合もありますので気をつけます。

△ねり白粉、衿白粉 これも水白粉同様で影はうすくなっています。これに代るもののがクリー

ムおしろい、乳化おしろい、でしよう。

以上、三種とも近代化された商品の方が在来のものより、ヒフの面、或はメー キヤップの効果においてもすぐれていることは申すまでもありません。その意味でもごく一部の利用に止まり、いずれは過去のものとなるものとも云えます。

△頬紅 粉おしろいの原料に顔料と湿潤剤とをよくまぜてプレスした商品です。顔面に陰影や立体化をつけるアクセント用のもので、必らず化粧の最後の仕上げに用います。色は勿論、好みですが口紅の色と同系色を使うのが普通です。決して素肌にじかにつけないようになります。そうでないとヒフにシミを誘発したり、色やけの原因となることもあります。

△眉墨 主成分は炭素で、それに顔料や油脂をまぜて最近はペンシル型が主力をなしています。眉墨は普通化粧の場合は理想としては、おすすめできませんが、実際には自然の形では心細い方の方が多いようです。主成分の炭素は家庭で使用しています木炭とは全然原料がちがつて、やしや馬の骨を焼いて精製した特別の炭ですが性質は全く同じです。即ちよく油氣や水氣を吸着する性質がおしろい粉末のそれより強いものです。湿めつた場所に木炭をおいて乾燥させた

り、ぞんざいに火ばしを使わず手であつたりすると、すぐ荒れたりするのもこのためです。

ですから使用する際は、その前にコールド・クリーム、栄養クリーム、またはオリーブを十分眉につけた上で画きます。

眉の形が悪いとか、うすいとかのために使うだけに、画く場合も指先きに力が入りますと、そこに摩擦が起きます。大きさにいえば少ない毛をすり減らすことになります。他方毛根に必要な皮脂分が炭にすわれ、栄養失調から毛根がゆるみ、前の摩擦と相まって脱毛を促進することとなります。それを防ぐ意味で、口紅の場合とは正反対にさきに油気のものをつけておきますと、眉墨の炭はその成分を吸いとり満腹になつて皮脂まで喰べる力がなくなります。従つて毛は安泰でしかもつけたときツヤもあり、メーキャップの効果も上るということになります。

おしゃり同様、就寝前や必要でないときや場所ではなるべく休息をあたえる意味でも、毛の保存のために使わないようにしたいものです。色は勿論、好みですが自分の髪の色に合わすのが無難です。

△アイシャドウ　目の周囲に陰影をつけるのによく用いられます。コールド・タイプと口紅タイプの二種があります。普通はコールド・タイプで、舞台化粧などには口紅タイプの方がよいです。

しよう。

最も上手な使い方のコツは、明るい鏡の前で自分で満足した状態よりも半分にうすくすることです。こうすれば外出しても病的に見えたり、いかにもつけていますといった不自然さもなく、好感をもたれます。

△ネール・エナメル　爪の化粧料ですが無色のものから各色あります。原料は有機溶剤にセルロイド系をとかし顔料を加えたものです。使用した際、一様に乾かずムラになつたり、汗をかく（表面に水滴が生じること）ようなものは処方が不完全なものです。

このものの主目的は手の美しさを引き立てる役です。つけようとするには顔の場合でも素肌を土台とするのと同様に、爪自身の手入れをまずしなければできません。ですから爪を手当すると云うことが、ネール・エナメルをつける以前に行われると云うことは大変な美しさの努力につながります。

爪はヒフと同じくケラチン蛋白質の強度なもので、成分中に水分（七一二%）が大事な役をしています。靴だこがだんだん固くなると爪に似てくるのは、角質の水分が少なくなつて爪に近くなつたことであるし、硬い爪を切るときは微温湯につけたあと、またはお風呂上りにきるもの

水分を余計にして軟かくするためで、もともとヒフと同じ性格をもっています。

ネール・エナメルを常用しますと表面がフィルムの膜でおおわれていますので、水分の調節が不可能になつて不足がちとなり、モロクなります。ちょっとものに当つても破碎するのもそのためです。

ですから、ときどき除光液で取り除きネール・クリーム、栄養クリーム、コールド・クリームなどを十分につけてよくマッサージして、一晩ぐらい休ませることをして頂きます。

とに角、いつまでも美しくありたいとか、美しいと云われるは、人一倍神経を使つて、絶えず基礎の手入れを怠つては望めないと云うことを十分納得して実行していくことに尽きます。そのような意味も含まれて出版したわけです。

お化粧法について

今までの基礎、並びにメーキャップ化粧品の解説で主に顔を美しくすることに必要な一応の知識を受けとつて頂いたと存じます。

そこで最後にとりまとめの意味で化粧法のいろいろについて簡単に記してみましよう。勿論、個性、環境、年令、場所、季節など各条件によつてまちまちであるのは致しませんが、美しいと云うことを、素肌の美しさ、メーキャップの美しさとに分けた考え方を建前にして進めてゆきます。

素肌美を守る化粧 美しさの土台となる根本的なもので、いまさら素肌の美しさについて多く語る要はないでしよう。幼児の頃と同じようなツヤと弾力と表情に富むヒフにするのが、或は維持するのが最大の目的ですから、なるべくヒフに必要なものの以外は用いないようになります。即ち、基礎の化粧水、クリームで守り、できるだけ余計な神経や労働になるものをさけることです。そして、食事や睡眠と同じように毎日怠らず繰り返すことがその秘訣でし

よう。

普通化粧 家庭内でのお化粧ですから、やはり素肌美を基礎にして各自の個性を十分に活かす化粧がほんとうでしよう。

まず素肌美を守る化粧の上に、ファンデーションをごく少量のばし、口紅も軽くつけます。眉墨は形が自然に美しければ用いません。そして一日、二一三回素顔からやりなおして頂くのが最も若さを守る道です。

外出化粧 素肌を守る化粧をいつもより入念にした上に、好みに応じて、メーキャップして頂きます。勿論、使用される色は服飾と調和するように心がけて下さい。時間が余り長い場合は外出さきでも一回ぐらい、化粧なおしするぐらいにヒフのことを気づかつて頂けば十分です。帰宅されたら晴着を着換えるのと一諸にメーキャップもきれいに落しさつて、十分休息をとらせる習慣をつけることが一番お願ひしたいことです。

舞台化粧 職業的なメーキャップで前記の化粧のように近くで美しくみせるのではなく、暗い場所で遠目を美しく見せるためには、そばではみつともないほど誇張しないと効果が上りません。要するに自分の顔の上に別な顔を一皮つけると云つた心持でやります。目的が終つたら、少しも早く完全に落しておくことで、それを見てまめにするかしないかで、ヒフのいたみに大分差がつい

てくるものです。洋装の下着にもアンダーウエア（肌に直接ふれて保温と衛生の役目をするブルーマー、ショーツ）、ファンデーション（体のプロポーションを整えるブラジャー、コルセット）、ランジェリー（スリップ、ペチコート）と云う風にちゃんと順序正しいつけ方があるくらいですから、人目につく化粧はなおさらのことでしょう。

頭髪化粧料

頭部の毛髪に用いる多種な化粧品ですが、その目的は毛髪の栄養、保護、整髪などです。まずこれらを知るまえに毛髪と頭部の性状のあらすじを知つて頂きます。

わたしたちの毛髪はシスチンと呼ぶ、アミノ酸を多く含むケラチン蛋白質からでけています。ですからヒフと毛髪と爪は親戚関係にあるとも云えます。ヒフ、毛髪をソフト・ケラチン、爪をハードケラチンと呼ぶのもそのためです。水分は最高三六%を含むと云われますが、通常一〇%内外と云つております。ヒフや爪と同じようにやはり水分が普通より多い場合は軟かく、少ない場合は硬くバサバサになります。毛の太さは約〇・〇二七一〇・一耗で、断面は各種の形がありますが、その構造はみな同じです。生長は一日〇・二一〇・三耗ぐらいで日中は夜間より速く季節的には春夏の方が生長度が他の季節より大きいとも云われています。

普通、頭髪の本数は一〇一二〇万本が平均で、生命は三一五年、一日に五〇一七〇本ぐらいが抜毛しています。従つて手入れの仕方にもありますが、ある程度の抜毛は新しい毛と入れ代るた

めのもので心配することはありません。

頭部のヒフも他の身体のヒフも構造には変りません。フケは頭部の角質が剥離してできるもので、他のヒフの部分で云うアカに相当するものです。従つて、アカ同様に乾性と油性とがあります。カサカサした雲母のようなフケは乾性的の肌の人も多いもので汗腺と共に皮脂腺の働きが衰えたときでありますし、ネバリのあるフケは油性的の肌で皮脂腺の働きの旺盛な場合です。従つて使用する化粧品もちがつてくることになります。

これらのフケの手当如何が大切な毛髪を維持する鍵になることは、ヒフの若さを保つために、アカのない素肌の手当と全く同じ理屈です。

毛穴から分泌する皮脂は、毛が多ければ多いほど、また長ければ長いほど毛さきの方まで自力ではのぼつていけません。絶えず分泌する皮脂は順に同じ場所にたまつて、丁度、秋の落葉が地上につみ重つて日陰になり、雨にうたれ酸酵を起し堆肥になると似た状態になつて、カユミを生じ異臭を出し、毛根はむれて弱くなり脱毛の原因となることが多いのです。

頭髪化粧料はそれらの原因を取り除く目的もありますが、要は自然の生理を人為的にも助けて上げるようにすることが一番大切なことです。例えばよくブラッシングを行う習慣をつけますと皮脂は物理的に毛の全体にゆき渡り、ツヤと保護の役目を果し堆肥にもなりません。抜毛のよ

うな無駄なものを残さないで清潔にもできますし、地肌の血行も盛んになつて、麦ふみと同じ理屈で毛根はしつかり根を下し、毛髪の保存や育成にかなり役立つものですから、肌の基礎の手入れ同様に毎日怠らずやつて頂き度いものです。そして、それを助成したりするものがこの化粧品の役目と考へて頂きます。

整 髮 料

△植物性ボマード 純植物性のヒマシ油（リチネ油とも云う）に脱臭精製木蠟（ハゼの実からとつたわが国特産の油蠟）とを混融し、更に各商品に夫々特長のある養毛剤、例えばコレステリン、レゾルシン、葉緑素、感光色素、ヒノキチオール（トロボロン誘導体）などを夫々加味し香料を添加製します。

使用原料は薬剤以外、すべて植物性で日本で考案された純日本式のボマードと云う意味でも、その特性と共に広く使われています。

非常に粘度が強いわりにサツパリとした感触がありますので、毛髪を固めてしまうこともなく、くせ毛をおします。またアルコール、石鹼にとけますので洗髪もたやすいわけです。主に養毛をかねて整髪用として用いますし、毛切れ、裂毛の予防にもなります。ただしすべて名の通り、

植物性ですから、多少とも原料に特有のにおいがありますので、香料によつて、それを上手に力バーするかどうかで商品の品位が上下する傾向があるようです。

△鉱物性ボマード 精製白色ワセリンに香料を添加したものや、固形パラフイン、流動パラフイン、セレシン蠟など加味したものもあります。いずれも石油原油から精製します。従つて文字通り鉱物性なわけで、植物性が日本産であれば、これは外国産と云うわけです。いろいろの化粧品がありますが、品質とともに明確に純日本産、外国産とはつきりと区別できるのは、この二つのボマードでしょう。

精製鉱物油は無臭ですから香料のにおいがつけやすいために、一名香水ボマードなどとも云われるくらいにおいては思うようにつきます。反対にアルコール、石鹼にとけませんので、洗髪はなかなか大変と云えます。軟かい毛髪に整髪とつや出し程度の目的に少量つけます。

△乳化性ボマード コールド・クリームと感違ひしそうな性状をしています。ヒマシ油を他の鉱、動物性油と乳化させたものです。云わば前二者の合の子的な存在です。ですから性状、用途ともに両者の中間をゆくわけです。ただ硬い毛の整髪にはちょっと腰がなくてたよりないのが唯

一の欠点でしよう。男性の整髪と云うよりむしろ養毛を主にした考えでお使い下さい。その点女性の洋髪のつや出し栄養の目的には、理想的な商品とも云えます。

△ヘヤー・クリーム 流動パラフイン、ラノリン、その他の油脂を乳液状にしたもの。整髪より毛髪の栄養を主にしたもので、毛質の内部にまで滲透して毛質に必要なコレステリン、レシチン、乳化された水分などを容易に吸収させるように仕組んであります。

女性の髪、特にコールド・パーマで損われた髪には理想的な商品でしよう。最近、殊にこの類の商品が目立つて多くなりましたのも需要の多い証拠です。濃淡は基礎化粧品の乳液と同様、好みで選びますが、油と水が分離したものは目的が半減しますのでさけるべきだと思います。

△香油 流動性の油に香料をませ、主にツヤ出しをかねた養毛、並びに栄養目的に使われます。原料からみますと次ぎの四種があります。

純鉱物性 流動パラフインに香料をませたもの、ツヤ出しと、においを主にします。
純植物性 椿油、オリーブ油に香料をませたものと、無臭にしたものとがあります。毛質の栄養を主にしたものですが、粘性がありますので少々ベトつくくらいがあり、従つてホコリをつけ

やすいから、ごく少量をよくのばすようにしてつけて頂きます。

鉱植物性 前二者を混合したものですから目的も自然、両者を併用した形をとります。ただし、植物性ヒマシ油はまざりません。

鉱物性液 流動バラフインに、著色したアルコールを加え當時は二液層をしています。用いる時よくふりませて少量を用います。純鉱物性より粘性がなく、毛髪のすみずみまでよくゆきわたるわけです。ツヤ出しが目的です。

△びん付とすき油 香油のうち純植物性はむかしから東西で広く応用されていましたが、これを商品化したのがこの種のものです。主成分の香りは丁字香で、日本髪特有のにおいとまで考えられているほどのものです。現在は洋髪に主力を奪われほとんど影をひそめてしましましたが、古い年代の方にはまだそののこり香が漂つていてことでしょう。

原料はいずれも白絞油（菜種油を精製したもの）と木蠟ですが、びん付は蠟分の多いもの、すき油はその反対になっています。整髪、くせなおしが主な目的です。

△チック コスメチックとも呼びます。内容は、口紅とやや似た動植物鉱物性油脂を乳化剤で固

めたものです。主にくせなおしと整髪の目的に使用します。

云わば、びん付、すき油をモダン化して現代人の嗜好に合せたものと云えます。殊に硬い毛くせ毛の整髪にむいています。

ローション頭髪料

△ヘヤー・ローション 頭髪ローションの代表的な呼び名で、基礎化粧料の化粧水に似ていますから頭の栄養化粧水と考えて頂けば理解しやすいでしょう。

処方例

アルコール

七〇—八〇%

湿潤剤(グリセリン、プロピレン・グリコール、ヒマシ油)

三十五%

殺菌剤

〇・五%

養毛剤(コレステリン、レゾルシン、葉緑素、感光色素、ヒノキチオール)

適

〇・二%

ハツカ脳
香 料

二% 宜

蒸留水または純水

一〇〇%

皮脂腺や汗腺の働きを適当に調節し、フケの発生を防ぎ、カユミをとめますし、整髪料の油脂に外部のホコリが附着し、それが頭地熱と太陽光線で温められ所謂、酸化して生ずる異臭を和らげることも役のうちです。またアルコールが毛根に刺戟をあたえ、なかにとけている養毛剤が養分となり、脱毛を防ぐと同時に、アルコールが気散するときの気化熱で頭地肌に清凉感をあたえたり、殺菌したり、常に地肌の正常な生理作用を助け、清潔に保つ大切な役目をしています。

朝晩、ブラッシングの際、適当量を地肌にすり込むように使います。一番上手な使い方は脱脂綿にふくませてよく地肌をマッサージしますと、量も少なく顔や衿におとす必配もありません。使用した脱脂綿は汚れが目立つまで何度でも使いますが、汚れの程度で地肌や髪の汚れも知ることができます。

△ベーラム もともと南方特産のベー葉をラム酒（甘蔗糖製造の際得る、糖蜜をうすめ醸酵して得る蒸溜酒、アルコール分七〇%ぐらいである）に漬けて得た芳香酒が起源で、ヒフの殺菌消毒用に使われていたところから、それが改良され頭髪殺菌化粧料として東洋的な芳香と共に、重

宝がられて いるわけです。従つて、地肌の殺菌を主にしたもので、不潔になりやすい地肌に生じやすい吹出物やひいてはそれから起る脱毛を予防します。洗髪代りに前同様に十分地肌にすり込みます。

△オーデキニー 毛髪の強壮剤として常用するものです。発毛促進剤として、カンタリス・チンキ、キナチンキなどを主剤にしたヘヤー・ローションですが、次ぎに述べますヘヤー・トニックにおされて、現在市販品は殆んどかけをひそめておるようです。

△ヘヤー・トニック 養毛料といつた方が通りがよいほど現在はトニック時代になりました。毛髪とホルモンは深い関係があるといわれています。昔はみどりの黒髪とかいって美しく豊富な髪の持主は美人の要素の一つになつていったようです。今では美しい髪もいろいろの見方があつて濃くて黒いのが良いとばかりいえませんが、誰もが喜ばないのが禿でしょう。前頭からテンペンにかけて禿げあがる男性の若禿は男性ホルモンが過剰なときにつくるという説があります。事実、その部分に女性ホルモンを長期にわたつてぬりますと、禿がとまるとも、また皮脂腺の働きをおさえる作用があるともいわれています。

そこで、現在の養毛料にはヘヤー・ローションのうち養毛剤として、女性ホルモン、感光色素、トロポロン誘導体、その他、いろいろの薬剤を加味したものが市販されています。

シャンプー料

ヒンズー語でマッサージするという意味がシャンプーの語源と云われています。一般に毛髪及び頭皮を清潔にするための洗浄剤を総称して云つております。従つてほとんどが水と併用して使用されます。

シャンプーにはいろいろの種類が市販されておりますが、その必要条件は次の通りです。

- (一) 毛髪、並びに頭皮から汚れをよくおとし、しかも刺戟性のないこと
- (二) 毛髪や頭皮中の皮脂をとりすぎないこと
- (三) 水素イオン濃度(PH)八・五—九・〇弱アルカリ性であること
- (四) すぎ水に浮くアカが毛の表面に附着しないこと
- (五) 毛を柔軟にし、かつ、ツヤを出すもので、毛を硬くしたりもろくしないこと
- (六) すぎが簡単なこと
- (七) 好ましい香りであること

(八) 携帶に便であり、使用に余り複雑性のないことなどが商品の価値を左右します。以下各種について簡単に解説をしてゆきましょう。

△石鹼シャンプー 普通の化粧石鹼はソーダ塩ですが、シャンプーの場合は椰子油のカリ石鹼で、すすぎが便にしてあります。液状、粉末状、クリーム状、ゼリー状の各種があります。オリーブ油も原料油脂として使われることもありますが、椰子油ほど泡立ちがよくありません。最近の商品は界面活性剤として広くエタノール・アミン塩が使われていますがこれは乳化力が強く、かつ前項の条件に満足します。透明度を保持する目的でアルコールを加えたものや、各種の殺菌剤や硫黄製剤を加え特長づけたものもあります。この種のシャンプーの唯一の欠点は硬水、及び海水でよく泡立たないので洗いおちの効果が減少することです。

△ソープレス・シャンプー 高級アルコール系並びに石油系物質からつくられた所謂合成洗剤を主体にしたもので、前者に比し硬水、海水でも泡立ちがすぐれ、従つて洗净力、起泡力、浸透力、乳化力などいずれも優れていて却つて毛髪、並に頭皮中の皮脂をとりすぎるくらいがあるので、商品は更に他の油剤、乳化剤、カリ石鹼などの適量を添加しているのが普通です。

△オイル・シャンプー 切毛、裂毛の原因とならないよう、油を補給する意味で、シャンプー後にオリーブ油、椿油の数滴を頭皮によくマッサージし、ムシタオルでよくムシます。またシャンプー剤に直接まぜて使用する場合もあります。

△エッグ・シャンプー 乾燥してバサバサしたツヤのない毛髪に、卵白をよくねつてマッサージしたあとすすぎをします。以上は家庭内でできるシャンプーの例を上げてみました。

△酸性リンス リンスとはすすぎの意味です。シャンプーの後処理として完璧を期するために屢々行います。勿論、理想的なシャンプーでしたら特にその要はありませんが、往々にして洗浄力がよすぎるとか、或はアルカリ分が多くなるとか、その他の理由で毛髪や頭皮を荒すことも考えられますので、酸性液で中和する意味で普通、食酢をうすめて洗髪の仕上げを行います。毛髪や頭皮に残る石鹼カスは酸によつて分解し脂肪酸に変化しますので、毛髪が軟化し、ツヤを生じるわけです。

肌に化粧石鹼を使つたあと、アストリンゼントを用いてアルカリ中和能を助成する意味とよく

似ています。

シャンプーで洗髪の際、このすぎが最も大事なことです。例えばフケですが、これは石鹼液にはとけません。経験なさるようによく石鹼の泡はシャボン玉と云うように、一つ一つの小さな泡がぐるぐるまわっています。この表面にフケがのつて順次上層に運ばれて毛の間や頭皮から浮いてきて目的を達するわけです。そこでよく泡立たせることが洗浄作用を左右することになりますし、すぎがまた重要な役割を演じます。と云うのは泡の表面にのつて毛の間に浮き上つたフケをでかけるだけ泡立ちをながもちさせ、毛のはしまでおし上げると同時に、すぎを完全にしませんと、折角のフケが途中下車の形をとつて、洗髪して却つてフケが目立つことがあるわけです。男子の理髪の際にいねいに洗うのは頭皮ですが、細かいきり毛を洗いながらすために行うのも同じ理由からです。

△スプレー・ネット ヘヤー・ネットとも云つていますが、女子の整髪を乱さないように、従来網の細いアミを使用していましたが、あれの近代化されたものです。ですから主に洋髪の整髪に用います。そして、その商品の殆んどはエヤゾール化されてこの名称が一般化しています。
主原料は液化ガスとアルコールの混液に樹脂、ラノリン、乳化剤、潤滑剤などを組み合せたも

ので毛の表面にスプレー、アミをかけたときと同様に全体をカバーします。くせ毛でも硬い毛でも整髪が簡単にできますし、洗髪も乳化剤が加味されていますので容易です。香りが香油と同じ目的にもなる便利なものです。液化ガスには引火性はありませんがアルコールにありますので、火の近くでのスプレーはしない方がよいでしょう。

香 水

わたしたちの暮らしに深くとけこみすぎているために、丁度、基礎化粧料のようにさほどに感じていらないものに視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚と云う所謂、五感があります。この一つが欠けても楽しい暮らしは出来ません。その嗅覚に属する香水、即ち、においについて解り易くお話しします。

香水は選ぶにむずかしいもの、使いにくいものとの概念を抱いている方が多いようです。事実ほんとうのおしゃれは、においにはじまつて、においに終るとさえいわれていますが、似合ったにおいが個性にまでしみこめば、これこそほんとうのおしゃれと申せましょ。そこで、香水の生いたちからお話して、その選び方やつけ方を参考まで記します。

まず香水のすべてを知つてもらうには原料香料を知つて頂きましょう。これを大別しますと、天然、合成、調合香料の三種になります。

天然香料は植物性と動物性とに分けます。植物性香料は天然の植物の花、種子、葉、果皮、樹

脂、根毛、全草などいろいろな部分から適当な方法で（蒸溜法、浸漬法、抽出法、圧搾法の四種あり）自然に近いにおいのまま採油します、例えば、

花 \parallel ローズ油、ラベンダー油、丁字油

種子 \parallel ワニラ油、苦扁桃油

葉 \parallel ゼラニウム油、ユーカリ油

果皮 \parallel レモン油、ベルガモット油

樹脂 \parallel トルーバルサム油、安息香

根毛 \parallel ベチバ油、樟脳油

全草 \parallel ハツカ油、レモングラス油

動物性香料は特定地域の特殊動物から捕獲採集しますが、現に五種があります。即ち

海 \parallel 海狸香 \parallel カナダ、ロシヤ産の海狸の分泌物

麝香 \parallel 雲南麝香鹿の牡の分泌物

麝香 \parallel メキシコ産鼠の分泌物

靈猫香 \parallel ジャワ地方の麝香猫の牡の分泌物

龍涎香 \parallel 南方海面に浮ぶ抹香鯨の病的生産物の一部、腸ガンとも云われている。

合成香料は別名、人造香料とも呼ばれていますが、方法としては二つがあります。前記の天然香料を原料として主要成分のにおいを抽出する場合、例えば、靈猫香からシベトン、丁字油からオイゲノールをとることと、純化学薬品から複雑な工程を経て天然のにおいと同じものを合成する、例えばベンゾールからローズ・Pをといったことで、またの呼び名を単品香料とも云っています。

調合香料はわたしたちの一番身近かなにおいの名称で、単に香料とか、においとか云われているのはすべてこの香料のことをさしています。化粧品、香水、医薬品、食品、その他のにおいはいずれもそうです。これは前記の天然、合成の各原料香料を特定な法則に従つて、豊富な経験と感覚を生かし、所謂、調合して築き上げた香料のことです。従つてわたしたちはここで始めて香料とか、においとか云つても広範囲に亘ることを知つたわけです。云わば調合香料は日常生活と結びついていますが、その他の香料は約三千種ほどありますが、専門化されたものであることがわかつて頂けたと思います。

さて、この調合香料も更ににおいの成り立ちからいろいろに分けられますが、ごくおおまかには花香香料（主に花の香りに主材したもの、ヘリオトロープ、ローズ、ジヤスミン等）、複合香料（一名ブーケーとも云う、オリガム、フゼアなど）と想像香料（感覚にうつたえた調合で、

有名な香水は殆んどこの種のもの）とあります。花香、複合香料は化粧品や香水に用いますが想像香料は香水専門のものです。

香水は以上のような各種の調合香料を脱臭精製した香水用の特殊なアルコールとまぜ合して始めて出来上るわけで、わたしたちの肌にゆきつくまでは長い期間を要し、人知れない生みの苦労をしていることになります。

△選び方、つけ方

においの好き嫌いは嗜好品ですから主觀できめます。例え嫌いな香水でもそれがかならずしも悪いものではなくて、自分が好かないと云うだけのことです。

よく瓶口でかいでのよしあしをきめる場合がありますが、いずれの香水でも普通、三通りのにおいの階級があります。

一番さきにアルコール臭と共に鼻につくにおいを表立うわだち（トップ・ノート）と云います。これは原料中の軽い部分で、つけますとすぐアルコールと共にとんでいきます。

二番目に約十分から三十分間ぐらい、つねに、においが変る不安定なおいを中間の匂い（ミドル・ノート）と云います。

最後に、一、二番のにおいから、始めて安定したその香水の名にふさわしいやわらかみのある

においが立ちます。これを残立(ホスピタリティ)（ラステング・ノート）と云つて、香水の本命に当るわけです。

表立で好き嫌い、或はよいか悪いかきめる鼻の持主になるには、少なくも原料香料のにおいのかぎわけができる道に長くたずさわった専門家以外は無理なことです。わたしたちはこのようなかぎかたを鼻分析と呼んでいます。ですから、必ず香水の一滴をきれいな肌か、ハンカチにおとし表立をとばしたあとのおいできめて頂きます。

いつも、香水の色が話題になります。大体花香香水は色のうすいですが、複合並びに想像香水になりますと色が濃くなつてきます。香水は香りの芸術品とまで云われ、本場フランスでは外国に輸出して大きな外貨をかせいておりますように、香水の生命は色ではなくてにおいにあるわけです。早い話がえのぐの色や量を制約して豊かな芸術作品を画くことはできないのと全く同じわけですから、色にはこだわらないことが大事です。

また、どれが似合うのかわからないと云う場合が多いですが、茶や花の流儀とちがつてむずかしい形式はありません。髪型を顔型に合せるとか、衣服の柄を容姿に似合せるとか、年令、容姿、生活環境、場所、時などに調和するものであれば、それでいいわけです。要是自分が楽しいと同時に、相手や周囲にも不愉快さをあたえないようにおいであればよいわけです。

上手なつけ方は必らずスプレーを使つて頂きます。デリケートにでき上つている香水の瓶口を

じかに肌や衣服につけますと、ゴミを入れて色を濃くし（やけると云う）においの変化を起しますし消費量が多いことになります。

先ず、スプレーで下着に軽く吹きつけて、すぐ衣服をまといますと、表立は体温で温められて消え去ると一諸に残立が衣服のなかにこもり、それが移り香となつて漂うようになります。たび重なりますと後天性の第二の体臭になるわけですし、濃いからシミになると云う風な心配も御座いません。

つけてすぐ消え去るような錯覚をして余計に使うかたがおりますが、どんな敏感な鼻でも、つけて一〇分しないうちにそのにおいに鼻が馴れて感じなくなります。決してよく云われるサヨナラ香水ではないのです。自分以外にはよく感ずるものですから、くれぐれも余分につけないようにして頂きます。これがおしゃれの秘訣です。

特 殊 化 粧 料

△薬効クリーム これは最初に申上げた通り、わたしたちの考へてゐる化粧品とはかなりちがつたケースのものです。即ち、目的を治療することにおいているものであります。

薬効的なもので考へられますのは医薬品の軟膏がまず頭に浮びます。

外見や使用する場所がヒフであることや、いろいろの油脂、その他を原料としている点など似かよつてゐるために、誤解されがちですが要約しますと、軟膏類は病的なヒフの治療目的や感染防止に用いるもので、今までお話を申上げた化粧クリームは無創のヒフの保健上の必需品ですから、両者の内容成分は無論のこと、その組み合せや乳化技術に於ても格段の差があります。

わたしたちのくらしのなかで内や外の肉体的な病気にからねば、これに越した幸せはないわけですが、これは殆んど不可能なことです。例えばおでき、創傷、腫物とか、やけどのような外部的なヒフ疾患にしても、わたしたちが今までにお話をしたヒフの機能は失われてしまうわけでから、化粧クリームほどの細かい神経を費さずにするわけです。云々換えますと、消失したヒ

フ機能に代つて不通気性の油膜で患部を覆い、空気中や衣服の細菌の附着を予防したり、拡大を防ぎ、同時に肉芽に直接、接触しますから軟膏中に含まれた目的の薬剤を容易に毛細血管を通じて体内に吸収させて治療の効果を保進するのが目的の全てです。そして治癒したら、すぐ取り除き日常は使用しないのが軟膏です。ですから一見、血縁同志にみられますか、全くの赤の他人と云うことができます。

薬効クリームは、以上の軟膏とはまた異つていますし、云わば化粧品と軟膏との中間的な存在で、法規では公定書外医薬品と云ういかめしい名称になっていますのもこのためです。以下、主だつた品種に就いて解説致しましよう。

△漂白クリーム 前述の通り異常なヒフに用いるもので、いずれのヒフにも用いるものではありません。即ちシミとか、色黒をおす目的で使用されます。

まずヒフの色の差は表皮の最下部にある基底層に存在するメラニン色素の量と、皮下の血管の分布状態、表皮の透明度などに関係しますが、なかでもメラニン色素の濃淡がその色を左右します。

メラニン色素はヒフの基底細胞中に存在するチロジナーゼ（ヒフ酵素）がチロチン（蛋白質）

に作用し、メラノーゲンに変化し、これがヒフ内で生体酸化されてメラニン色素となつて基底層に沈着します。こうして生産された色素はヒフの再生作用により徐々に表皮上層部に移動しつつ褪色し、最後に角質から垢となつて脱落します。毎日生産、沈着、移行、角化、垢という順序で休みなく繰り返されていますので、一定に止まつてゐるよう考へられてゐるわけです。

そこで漂白クリームに二つの種類があります。即ち角質の剥離作用を促進するものと、メラニンの生産を抑制するものとがあります。前のものは角化して垢となつて剥離する期間を短縮する意味で軟化剝離剤として白降汞、次硝酸蒼塩などが使用されています。

後者はハイドロキノンの誘導体でメラニンの生産行程を破壊する目的で臨床的に行うのが建前です。ベース状にした商品がありますが、ヒフの程度で慎重にやらないとアレルギーを起すこともあります。

△日焦けどめクリーム　日焦けの原因となつてゐる日光の部分は紫外線で、波長が二八〇〇—三五〇〇オング・ストロームの範囲です。普通以上に海や山で日光を長時間受けますと、まず色素を多くして日光を吸収し、直接に体内に及ぼす影響を防ぐ意味で色が黒くなるわけですが、その度合をすぎるとヒフが厚くもなります。適当の太陽光線はヒフの中でビタミンDをつくり（骨

格の発育を促す大切なもの）ますが、なにごとによらず過度はいけません。

紫外線を除けるには粉白粉でお話した通り、一番効果は期待できます。更になるべく白色を使うのが最もよいわけです（白色は全反射、反対に黒色は全吸収するので、夏は白っぽいもの、冬は黒っぽい衣服をつけるのもその意味で熱エネルギーを利用している）。

薬剤では紫外線を最も吸収しやすいもの、例えばパラアミノ安息香酸をベースに添加します。これらの薬剤は紫外線の吸収能力に限度がありますから、必ずしも、一定時間後にはつけ換えないと却つて使用していると云う安心感から長時間太陽光線中にいて逆の結果になりますので、余程注意して下さい。

△脱毛クリーム 毛を脱ぐわけではなく、毛をとかし切つて、一時的に無毛にする目的で使うクリームです。薬剤は硫化ストロンチユウム系統のものですが、かなり刺戟性のものでの使用する以外のヒフには予めコールド・クリームかワセリンなどをぬつて防ぐことと、使用後、完全にふきとり栄養クリームなどで保護しておくことです。

最近はコールド・パーマの主原料のチオ・ゴリコール酸を使つたものがあります。これは前のように硫黄くさくなく、殆んど無臭で刺戟も少ないものです。

化粧品と皮膚障害について

最近かなり神經質と思えるほど化粧品のヒフに及ぼす影響をさわぎたてる傾向がありますので最後に一言申し添えます。

化粧品に起因するヒフ障碍は

- ①化粧品の内容成分の一部がヒフ内部に滲透して起る場合
- ②内容成分の反射反応的に二次的に促される場合
- ③アレルギー性の場合
- ④正しい使用法を誤つた場合

などが原因するようです。しかも①から④まで同時に起る場合もあり、各々の単独からも勿論あります。

化粧品の各項で解説した通り、ヒフ科学の解明と共に内容、即ち使用される原料は広範囲に亘り昭和二十年前と全く品質を一変しております。特に乳化剤とその技術の進歩は驚くほどの速さです。従つて、ほんとうに栄養にもなり、色を白くすることもでき、うるおいをもたらせることもあります。従つて、と云うことは單なるカラ宣伝ではなくなつただけに、その効力の期待もます

ます大きくなる傾向にあります。化粧品は医薬品とちがつて素肌の美を保護し、かつ美しくみせるための云わば生活必要品であつて、治療目的に使用するものでないことを信じて市販されているわけですから、やはりより美しい肌、より美しくみせる仕上げが最大の目的であることを再認識してお読み頂きます。

ヒフ障碍のうち一番問題の多いのは③のアレルギー性の場合だと思います。

まずアレルギーと云う言葉ですが、これはギリシャ語の、反応性が変ると云う意味からでた言葉です。即ち生体が普通とちがつた反応を示すことで、例えばイワシを喰べてもなんでもない人と、ジンマシンができる人、解熱剤のアスピリンを飲んでアスピリンシンのできる人、新しい肌着でカブれる人と云つたぐあいに、そのヒフによつてなんでもないものが起す一種のカブレを一般にアレルギー、又は特異体質と呼んでいます。大げさに文化の発達した国ほど多いところから文明病などと呼ぶ場合もあります。

アレルギーを起す物質を抗原（アレルゲン）と云いますが、これが体内に入つて身体の中に抗体（アンチボディ）ができ、この抗原と抗体の反応によつてアレルギーが起るわけです。

この抗原はなにかと申しますと内容原料の一部で、しかも普通の場合にはなんでもないものただけに真に厄介なものです。

若し、世間でさわぐほどカブレがある化粧品がそんなに栄えるはずがないと思います。

また④の場合も、さきに述べたように内容の複雑化に従つて、化粧品ぐらいとたかをくくつて間違うとカブレることもあります。

例えば、色を白くするクリームを一日この程度と書いてあるのに、その量で効くなら、もつと余計につけたら早く白くなるだろう、ぐらいに考えて、思わぬ結果になることなど、よくきくことです。

とに角、くどいようですが現在の化粧品は品質、効果とも一〇〇%になつておりますので、決して昭和の始め頃の商品と混同しないで使用して頂き度いものです。

不幸にしてカブレを起した場合は

- ①まずその刺戟から遠ざかること
- ②あわてず専門医に診せること

③お化粧はしないこと

④自宅療法の場合は冷湿布する程度で素人療法の軟膏はつけないことと云うのは、最近の軟膏には化粧品同様な乳化剤が応用されていますので、乳化剤のために起つたカブレだとすれば促進するだけで効果がないこともあります。

あとがき

数多く市販されている化粧品のうち、その主流となる商品について、まえがき通りの解説を加えて参りましたが、限られた紙数のことですので、思うようにお話ができなかつた結果になりましたことは深くおわび申上げます。従つて、御了解に苦しむ点も多々あるかと存じますが、その節は東京化粧品工業会に御遠慮なく御申越頂き度いと存じます。

PR委員会の発足として第一回のものですが、皆様の御協力を得てよりよい読物に育ててゆき度いと存じます。

—— 備 忘 ——

—— 備 忘 ——

いまの化粧品

非売品

昭和三十二年十月一日発行

編者兼
行者

東京化粧品工業会

東京都中央区日本橋馬喰町三ノ三
電話 茅場町(66)四九八五番

無断禁転載

